

もづく生態調査

(新村、豊田)

§ 趣 旨

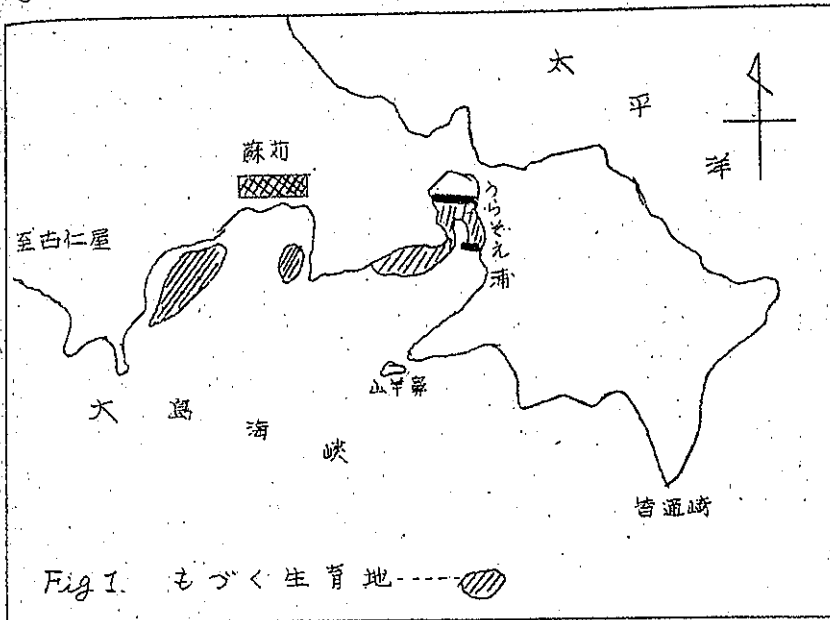
本群島産、有用藻類のうち、もづくは食用に供されているが、その大部分は未利用のまゝである。戦前「塩もづく」として移出されていたが、戦後その販路は断たれた。今回未利用資源開発の一環として、販路開拓、加工試験が行われ、もづくの利用率が増加しつつあるので、資源保護、増殖の基礎的調査を行った。

§ 方 法

古仁屋町蘇刈地先に生育するもづくを対象に、1月より、月2回を原則として生育場所、成長度、生殖時期等の調査を実施した。

尚、31年4月以降も継続調査中である。

§ 調 査 結 果



◎ 種 属
本種はもづく科CHORDART-ACEAEのおきなわもづく属 *Eudesme-viridescens* (Carm.) J. Ag にあり、琉球列島に産すと記載されている。(海藻図譜=岡田喜一) 本群島では一般に「す

のり」と稱している。

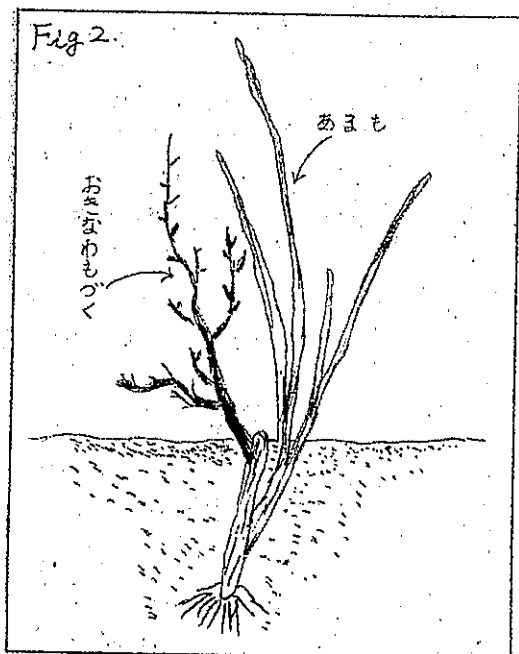
◎ 分 布

大島海峡の古仁屋町、鎮西村沿岸、笠利湾沿岸、焼内湾沿岸、与論島、与路島、請島に分布するというも、一部を除いては、まだ詳細なる調査はせず。

◎ 生 育 地

概して外海水の流通のよい内湾の干潮線附近に生育し、大潮、干潮線下0.5m附近が最も多い。蘇刈地先は、部落沿岸、うらそえ浦 (Fig 1) に砂泥地帯がある外は、殆どカンゴ藻が発産している。

もづくは主として、この砂泥地帯に叢生する。顕花植物の一種「あるも」の茎の基部附



近に附着している。又、4~5月頃になると、サンゴ礁片に附着するというも実際見ていない。

◎ 形態

体は緑褐色の、直径1~3mmの円柱状で、不規則に分岐伸長し、粘質に富んでいる。基部は、吸盤状の小円盤にて、他物に附着し、20~30cmに伸長する。

体の髓部は中軸系組織であるが、体表に向つて、放射状の細毛(同化系)を密生していることは、「ふともづく」に類似している。

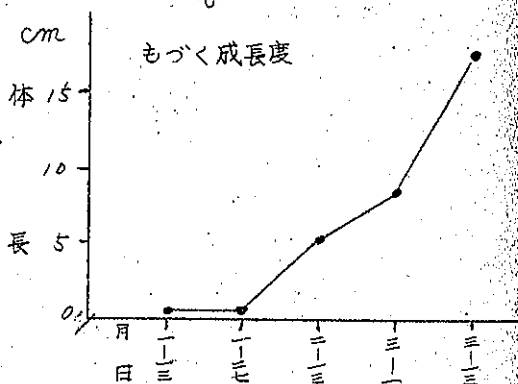
◎ 成長度

調査日に採集せしものを、10~20個体標本を作成し、各個体の体長を測定してその平均値でもつて表わした。

Table 1 もづく成長度

調査日	平均体長	採集した最大体長
1月13日	< 5.0 mm	30.0 mm
4 27日	7.13	41.0 mm
2月13日	54.15	133.0 mm
3月1日	87.18	254.0 mm
4 13日	177.10	268.0 mm

Fig. 3



表を見るように1月中旬頃、かろうじて肉眼で認められるが、旬を追って急激な上昇を示し、その成長の速いことが判る。事実、1月13日の初回の調査には、もづくの幼体を見付けるのに、海岸線をくまなく巡つたのであるが、1ヶ月後の2月中旬には、干潮線附近に真黒に叢生し、驚いた程である。

◎ 生殖時期

もづくは体の同化系基部に孢子嚢を形成し、又、同化系自体が接合子として、変生するとあるが、(海産植物学=藻類)3月下旬までにはかゝる変化は認められなかった。(註、4月中旬より孢子嚢の形成を認めた。)

しかして今後、継続して調査する必要がある。

§ 摘要、考察

もづくの生物学的研究もあまりなされていないようで、今後の調査は興味あるものである。

1月から3月までもづくの発生、生長があり、4月以降、成熟し、繁殖期に入るものと推察された。もづくは前述のように「あまも」又は「すがも」の他の植物に附着生育していたのであるが、地元民の言ではサンゴ礁中にも多数附着するといふ。未だ確かでないが、これら生態的調査もこれからというところである。

ふのり成熟期調

(新村、豊田)

§ 趣 旨

本群島の西北海岸には主として「はなふのり」が着生し、僅かながらも利用されている。はなふのりは、ふのり類中では良質の糊料を含有していることは周知であるが、本群島では、比較的かえりみられない。従つて利用増殖啓蒙の基礎資料を得るため、その生態特に成熟期の調査を行った。

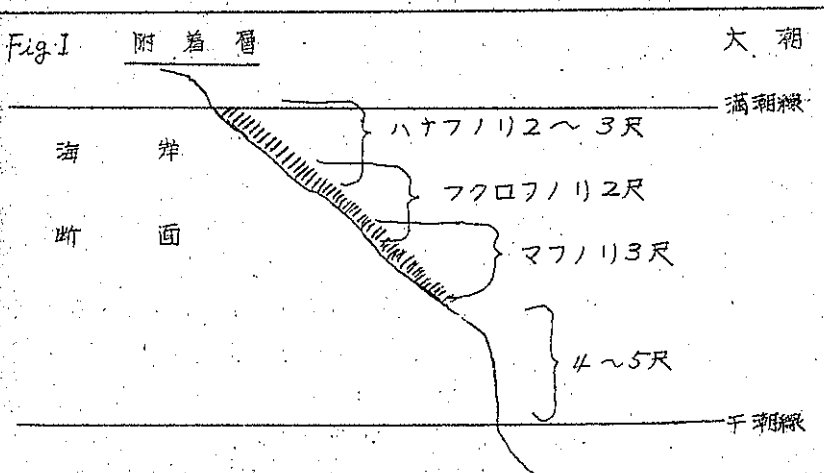
§ 方 法

1. 現地調査 実久村江に屋島、徳之島周辺一帯
2. 成熟状態調査 乗藻採集後、翌日まで陰干し、半乾燥せしものを、次の要領で実験した。
 - 原藻 10 gr を、新鮮な海水 2 lit. に投入し、30分後にスライドガラスに胞子の附着した量を算定した。(1 cm² 当り)

§ 調 査 結 果

◎ 生育地

○ 実久村江に屋島では、北西向の岩礁面に密生している。はなふのりは大潮、満潮線直下より



3尺附近まで、ふくろふのりは満潮線下2尺~4尺の間、まふのりは満潮線下4尺~7尺の間で、各ふのりとも2~3尺の生育層が認められた。

まふのりの最下生育線は、大潮干潮線上4~5尺附近にあつた。